

津軽弁翻訳システム開発へ弘大

サンプル市民らから

弘大×AI×津軽弁 プロジェクト

津軽語辞書

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
ん	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お

津軽語 (ひらがな) / 共通語:

前方一致 ● / ○ 部分一致

参考文献

一般から寄せられたテキストデータなどを使い作成された津軽語辞書。今後は次のステップとして広く音声データを募る

課題を抱えていた弘大は、同じくオペレーターの方言理解に課題があった東北電力と2017年度にAIを使った津軽弁の翻訳研究を開始。弘大はこれをきっかけに研究を進展させ、現在は津軽弁の音声データとテキストデータをAIに学習させることで津軽弁を誰でも理解できるシステムの開発と、データをアーカイブとして保存することによる伝承も目指している。

これまでは一般からテキストデータを募っており、寄せられた約1万例にデータを加え、昨年11月に「津軽語辞書」を公開。今回、次のステップとして、音声サンプルを収集するもので、スマートフォンやICレコーダーなどで録音した津軽弁の音声ファイルを専用ホームページ (<http://toban.jp>)へアップロードしてもらう。単語でも、文章でも構わないという。特徴的な津軽弁(さまさまな意味を持つ「け」など)については集中的に募るとい、ホームページには20の例文も紹介されている。

研究を行う弘大大学院理工学研究科の今井雅教授(48)は「まずは音声データを共通語へ変換することが目標。それができれば音声化することは難しくないので、いずれ可能性としては、津軽弁から英語、フランス語などへの翻訳も考えられる」と話し、広く協力を呼び掛けている。

近く専用アプリ公開

人工知能(AI)を活用し津軽弁から共通語への変換システムの開発を進める弘前大学は、市民らから広く津軽弁音声のサンプルを募っている。募集期限の3月末までに最低1万語を目指しており、弘大は「幅広い年代に寄せてもらいたい」とし、近く専用アプリも公開する予定。(西尾瑛)

で、患者の津軽弁が理解しにくい県外出身の医療従事者、附属病院など医療現場

※この画像は当該ページに限って

陸奥新報社が利用を許諾したものです。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp